私見卓見

どこで誰と学ぶ、還暦の気づき

一般社団法人定年後研究所所長　池口　武志

今月還暦を迎える。2年前に社会人入学した桜美林大学大学院からようやく「老年学修士」を取得できる見通しである。昨今、リスキリングの必要性が社会でも企業でも叫ばれている。この2年間の修士課程の体験から言えることは、何を学ぶかも大切であるが、どこで誰と学ぶかも同じくらい大切ではないかということである。

心理、健康、社会システム、高齢者サービス、死生学等多分野にわたる老年学の授業では、教授陣の講義を受けていると、37年間の人生経験から「本当にそうなのか」との疑問が次々と湧き上がってくる。そんな疑問を教授陣にぶつけ、意見を交換する楽しさを味わえた。38年前の受け身だった学生時代の姿勢が後悔される。

人生100年時代に必要とされるダイバーシティーの感覚を多少なりとも習得できたのではないかとも思う。クラスメートは、日ごろ会社では接点が希薄な介護士、看護師のみならず、自分にとって息子や娘世代の「学生」、女性の博士課程の研究者、高齢先進国の日本に学びに来ている外国人だった。37年間居心地のよい同質集団で過ごしてきた「会社員」にとっては、アウェー感が満載の環境であった。特に、若い外国人のクラスメートの意見や受け答えには、戸惑いも多かったが、典型的な会社人間の私にとっては、多少は包摂力が身についたかもしれない。

さらに「学問と実践の連動」が見えてきた。修士論文に必要な先行研究レビューでは、巨大な森の中で迷子になりかけたが、実践で培ってきた問題意識の強さが支えとなり、ようやく自分の研究テーマを絞ることができた。研究過程では「会社では当たり前に使っていた単語の意味」が通じず、改めて考えると自分自身も「よく分かっていない」ことに気づくこともあった。「学術論文」というものが、後世に実践活用されることでその価値を増していくことを知り、仕事に向き合う動機付けを頂くことができた。

仕事と学業の両立の2年間は、自分の中で眠っていた潜在的なリソースを呼び起こす貴重な時間だったかもしれない。超高齢社会の中で「定年」に左右されず、活躍できる社会の構築に向けて、これからも貢献していきたい。

当欄は投稿や寄稿を通じて読者の参考になる意見を紹介します。〒100－8066東京都千代田区大手町1－3－7日本経済新聞社東京本社「私見卓見」係またはkaisetsu@nex.nikkei.comまで。原則1000字程度。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記。添付ファイルはご遠慮下さい。趣旨は変えずに手を加えることがあります。電子版にも掲載します。